

夏休みを有効に活用する進路学習のために

自分の将来像が描きにくく、目的意識が低いと言われている今の高校生にとって、将来の展望を描き、それに向かう努力を促す進路学習の意義は高まっている。進路学習は「生き方を考える」といって性格上時間をかけてじっくりと取り組むことが必要になる。そこで、まとまった時間がとれる夏休みは、学期中にはできない活動を行う絶好の時期だ。夏休みに行いたい進路学習とその進め方、留意点を考える。

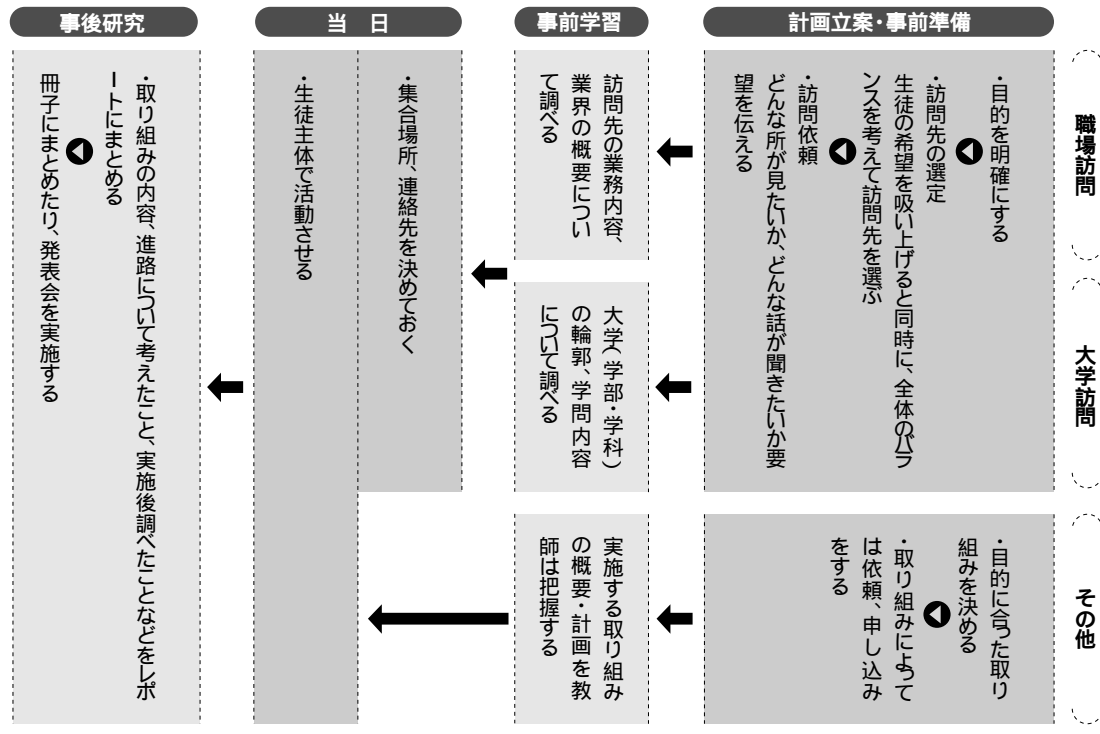
長期休暇中に行う進路学習の意義

ることである。生き方の選択とそのため必要な準備をいかに進めていくかという課題であるだけに、3年間を通して体系的で継続的な取り組みとして計画を立てることが重要となる。

単なるイベントにせず、時間をかけてじっくり取り組む

進路学習は、高校から大学・短大、社会へと続く中で自分がどのように生きていくかを考え、なりたい自分目標を設定し、それに向けて自分自身を成長させることである。生き方の選択とそのため必要な準備をいかに進めていくかという課題であるだけに、3年間を通して体系的で継続的な取り組みとして計画を立てることが重要となる。

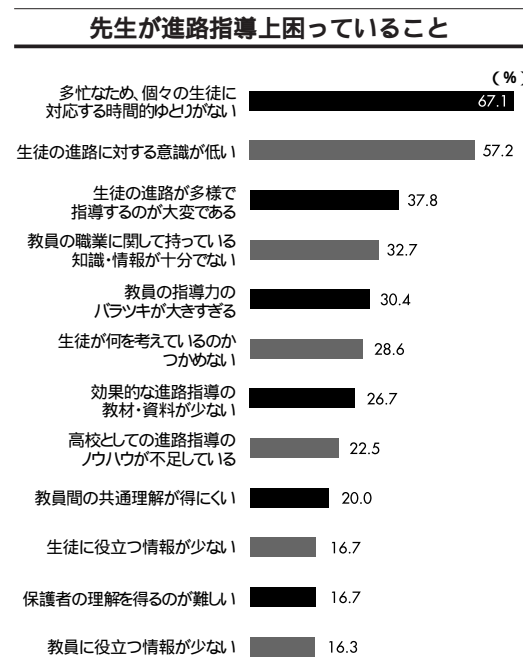
効果的な進路学習のためのSTEP



長期休暇中の進路学習

クラス運営・進路学習のための **VIEW'S method**

効果的な取り組みのための手順とポイント



生徒の目的意識を養い、学習へのモチベーションを高めさせることは長い目で見れば大きな効果をもたらすことが期待できる。この意味で、夏休みを活用した進路学習をより積極的に位置付けて考えてみてはどうだろうか。

夏休みにおける進路学習は3年間のプランの中で、全体のプロセスに沿って学年に応じたものを行いたい。具体的には「将来どんな職業に就きたいか、そのために学ぶ学問は何か、それはどんな大学で学べるか、今どんな準備が必要か」という進路

学習の大きな流れの中に位置付けて実施することが必要である。具体的な活動としては、職場訪問や大学訪問が挙げられる。実際に職場や大学を訪問する体験的な活動は、訪問に1日の大半を費やすため、教科授業のある日には実施しにくい。そこで、通常のHRで準備や事前学習を行い、訪問日を夏休み中に設定すれば実施が可能になるだろう。また、調査学習など、生徒が個々に長期に渡って取り組む活動も夏休みに行いやすい進路学習の一つとして挙げられる。

part 1

活動上の留意点

生徒の意欲と自主性を引き出すような準備と段取りを

進路学習全般について言えるが、夏休みの進路学習の場合も「何のために活動をするのか」という目的を明確にし、それに沿って計画を立て準備する。進路学習は生徒が自分の生き方を探すためのものであり、生徒自身が納得し、満足できる結論が得られることが一番望ましい。そのため、生徒主体で活動を進めることが重要であり、教師は生徒が主体的に活動できるようサポートをするスタンスで臨みたい。例えば、準備段階からできる限り生徒にも参加させ、受け身ではなく、能動的に取り組むという意識を生徒に持たせていくことが考えられる。

また、進路学習を1回きりのイベントに終わらせず、より効果を上げるために、生徒に事前学習・事後研究を必ず行わせない。事前学習では、具体的な取り組み内容、研究テーマ、調査するための視点、調べる方法を具体的に提示する。文献や問い合わせ先などを紹介するといった工夫が必要だろう。

事後研究は、体験を振り返り、新たな疑問点を調べることで、今後の進路選択の材料になる。研究結果を冊子にまとめたり、発表会を行うとよい。結果を共有できるだけでなく、ほかの生徒のレポートや発表を見たり、他者の考えを聞くことで、進路に対する意識が刺激されるといって効果も期待できる。冊子作りや発表会を行うことは、事前に生徒にきちんと伝える。これは生徒の意欲を高める上で大切だ。

生徒が個々に研究を行う場合は、あらかじめ計画案を提出させて、進路学習の目的にふさわしいかチェックし、必要ならば軌道修正していく。特に調査学習は1人でやるケースが多いので、計画段階で道筋をはっきりさせ、本来の目的と外れたものにならないよう方向付けたい。

part 2 職場訪問 準備

文系と理系 バランスの取れた 訪問先を設定する

社会人の働く姿を実際に見るといって、職場訪問は生徒の進路意識にダイレクトに訴える取り組みだ。充実した職場訪問は、生徒の目的意識を高め、大学進学を目指す意志を高めることにつながるのでうまく活用したい。

まず取り組みの目的を明確にする。目的には大きく「職業観の育成、職場への理解」と「学校外の人との交流から社会性を身に付ける」の二つが考えられる。どちらをより重視するかによって、準備の方法や力を入れるポイントが異なる。

次に訪問先を決める。アンケートを取るなどして生徒の関心を吸い上げ、文系・理系のバランスをとった様々な種類の職場

を設定したい。

生徒の自主性を促すためには生徒自身に訪問したい企業を探させるとよい。候補の職業分野が偏るようであれば、教師が適宜アドバイスをする。

訪問先は同窓会、保護者や教師の知人などを頼って探すのが一般的だ。依頼先に訪問の目的を文書などで示すと理解を得やすい。ただ、日程や参加人数などを理由に断られることもある。一人の教師だけで訪問先を探すのは難しいので、学年団の教師で分担して行いたい。

訪問依頼は、活動の目的が「学校外の人との交流から社会性を身に付ける」に重点を置く場合、生徒自身に依頼文書を書かせ、電話をさせるとよいだろう。ただいきなり生徒に電話させると依頼先が戸惑うので、事前に教師が依頼先に生徒から電話がある旨を伝え、依頼文を送付するとよい。生徒にアポイントメントをとらせる場合、電話のかけ方や文書の書き方のアドバイスも必要となる（下記のコラム参照）。市販のマニュアル本などを参考にさせることも考えられる。

part 3 職場訪問 事前学習

業界や訪問先の 研究をし、 質問内容を考える

事前学習は、職場の様子を垣間見るだけの見学会に終わらせないためにも必ず取り組ませたい。特に職場訪問の目的を「職業観の育成、職場への理解」に置いている場合は、じっくり取り組ませることが必要だろう。

訪問先については、事前に会社案内を入手したり、インターネットで検索したりして調べさせる。その業界や職業については、『職業まるわかり事典』（小社刊）を利用したり、大学生の就職活動用の「業界シリーズ」「職業シリーズ」といった類いの本を参考にするとよいだろう。

調べたり、まとめたりする項目としては、訪問先の業務内容はどんなものか、訪問を通してどんなことを学びたいか、など

がある。また、訪問先との打ち合わせの段階で「質問の時間」を設けてもらいたい。質問の内容は「質問を事前に考えさせること」で企業や職業についてより深く調べる動機付けになり、実際に働いている人から生の声を聞くこともできる。質問の内容は「仕事でやりがいを感じる」と「つらいとき」といった精神論だけでなく、生徒のその後の進路決定に役立つ質問、例えば「その職種に就くにはどんな道筋が必要か」「どんな勉強がその職種に役立つか」といった具体的な内容も聞くように指導したい。

事前学習の内容はレポートにまとめさせ、できれば冊子化すると便利だ。当日携帯できる他、生徒が調べた内容を共有化できるだけでなく、事後研究にも活用できる。

訪問先について事前に 調べておきたいこと

- ・どんな業務内容か
- ・社会に対してどんな役割を担っているか
- ・どんな職種の人が働いているか
- ・どんな知識や能力が求められるか
- ・どんな経営戦略がとられているか
- ・業界の課題は何か
- ・業界の今後の展望はどうか

VIEW'S method

クラス運営・進路学習のための

効果的な取り組みのための
手順とポイント

2

長期休暇中の進路学習

当日の行動は 訪問先と綿密に 打ち合わせする

せっかく訪問を承諾してもらっても、あらかじめ決められた見学ルートを回り、業務内容の説明を一方的に受けるだけでは、体験的学習とは言えない。特に「職業観の育成、職場への理解」を目的としている場合、生徒が主体的に参加できるように、事前に訪問先に対して、少しでも生徒が実際の仕事を体験できるようにしてもらえないか相談するとよい。ただし、あまり大人数での訪問だと、生徒が仕事ができる場を作るのは難しい。で

きるだけ小人数のグループで一つの訪問先に行けるように計画を立てたい。それにはアポイントメントをとる段階で、多くの職場の承諾を得る必要がある。訪問先でのタイムスケジュールを決めることも必要だ。例えば昼食を挟んで実施する場合は、昼食をどうするのかを含め、学校側の希望をいくつか挙げてから訪問先と相談しておきたい。訪問先が決まったら、生徒から希望をとって訪問先に振り分ける。訪問先の名前の一覧だけで決めさせると、生徒は興味本位で選びがちだ。それぞれの訪問先の見所を簡単にまとめたものを配るなどの工夫をしたい。

職場訪問の依頼文書のポイント

職場訪問の受け入れ先を見つけるにあたっては、電話で担当窓口（多くの場合は広報担当や総務担当）に簡単に口頭で依頼内容を説明し、その後正式な依頼文書を送付する。

生徒が依頼する場合

取り組みの目的を伝える
将来について考えるための進路学習を行っていること、職業や社会に対する見方を深めるために、実際の仕事現場を体験したい旨を説明する。

職場訪問の形態を伝える
いつ、何年生が何人くらい訪問したいか、希望する訪問内容などを説明する。

訪問当日までの準備を確認する
事前に訪問先について調べるために、資料を送付してもらいたいことを伝える。

教師が依頼する場合

上記のことにプラスして、以下のことも伝えたい。

生徒が実際の仕事の現場に身を置いて、現実の社会に触れる体験の重要性。
教師の引率の有無。
訪問の際、生徒に対して特に行ってほしい指導や注意。
当日の行動の詳しい事前打ち合わせ。

part 4 職場訪問 当日、事後研究

発表により 理解の深化と 自己表現を訓練

訪問先への交通手段は、大人数で同じ訪問先に行く場合はバスをチャーターするとよいだろう。生徒だけで現地に集合する場合、事前に行き方、集合場所などを確認する他、途中で道に迷った場合の連絡先も決めておく。事前学習でまとめた冊子を当日携帯させ、連絡先などを明記しておくとう安心だ。

訪問先では、生徒主体の場にするのを心がけたい。生徒の中から代表者を決めておき、その生徒を中心に進行させると比較的スムーズに進むだろう。生徒の態度がきちないと、ついで助け舟を出したくなるが、指導・注意は最小限にとどめたい。担当者への質問なども生徒主導でさせるようにする。

訪問先の数が多い場合は、教師が同行できないこともある。しかし、生徒に主体的な行動を促すためには、むしろ教師が同行しない方がよい面もある。教師が訪問先を巡回するという方法もある。

職場訪問終了後には、実施した内容、そこから学んだこと、反省点、進路について考えたことなどをグループごとに、あるいは個人でレポートにまとめさせる。他にも、事前に用意した質問に対する担当者の回答、質問をきっかけにその後調べたことなどをまとめさせるとよい。

発表会を行う場合には、単にレポートを読むだけでなく、模造紙に研究の結果をまとめさせて発表するなど工夫させるとよい。結果を目に見える形にまとめる作業を行うことで、生徒はいつそ熱心に研究に取り組むようになる。また、自分の考えをまとめて他者に分かりやすく説明するという、自己表現の訓練の場となる。発表会の形式や内容についても、生徒に自由に組み立てて、教師はアドバイザー的な役割に徹したい。

part 5

大学訪問
準備、事前学習

単なる大学紹介に ならないよう 大学側に要望を

大学で学べる学問領域、研究の具体的な内容、希望する学問領域では何ができるのかなどを実感する機会が大学訪問だ(3年生の場合は志望校を自分の目で確かめる意味合いが強い)。実施にあたり、まず目的を明確にする。大学の雰囲気や設備がわかればよいのか、施設・設備も見たいのか、学問の中身にも触れたいのか、目的によって訪問先内容が変わる。

大学訪問で比較的手軽なのは、オープンキャンパスを活用する方法だ。内容は大学により異なるが、教授の模擬講義や、大学生による学生生活の話、施設の内などが行われる。大学側にとってはPR的な要素も強いため、オープンキャンパスの印象

だけに頼るのは早計だが、ある程度の感触はつかめる。

オープンキャンパスは基本的に大学側が内容を設定するものなので、もう少し掘り下げて知りたいという場合は、個別に大学訪問を依頼する方法もある。何が見たいか、どんな話が聞きたいか、具体的な要望を高校側から提案するとよいだろう。

訪問先が決まったら、その大学、学部・学科、学問内容について生徒に事前学習をさせる。大学案内やシラバス(講義要項)、『学べる大学探せる事典』(小社刊)などで学問内容について勉強させる。シラバスなどの大学独自の資料は大学に直接請求して入手するが、その際の生徒の学部・学科研究のために使用する旨を伝えれば、比較的入手しやすい。

大学を訪問したときの チェックポイント

- ・大学の雰囲気はどうか
- ・施設、設備はどの程度充実しているか
- ・その大学(学部・学科)の特徴は何か、社会の特にどんな課題に応えようとしているのか
- ・自分が学びたいことがその大学(学部・学科)で学べるか
- ・質問に対する教授、学生の答えはあったか
- ・模擬講義で感じたこと

part 7

その他の取り組み

大学や公的機関が 行うイベントを 積極的に活用

職場訪問、大学訪問と同様、いずれも事前学習・事後研究を重視させることが大切だ。

特に生徒が個々に取り組みを行う場合、進行状況をチェックしたり、事後の発表の場を設けたい。個別的活動と集团的活動をつまみ合わせることが、生徒のやる気を高めたり、生徒によってばらつきがちな成果を一定レベルまで引き上げることができるだろう。

調査学習…学問研究、大学(学部・学科)研究、職業研究など。図書館・新聞・インターネットなどの利用が考えられるが、参考文献はあらかじめ提示して生徒が調べやすいようにする。
インタビュー…両親、親戚、卒業生などに仕事や学問、大学の

part 6

大学訪問
当日、事後研究

事前学習と 訪問結果を 照らし合わせる

大学訪問にあたっては、集合場所、交通手段、緊急の際の連絡先などを確認させておく。

当日は、教授や大学生に質問をする時間を設けてもらうことが望ましい。事前学習したこと念頭に学問内容、大学の様子がわかるような質問をさせる。大学訪問に立ち会う大学生は大学側が用意した学生なので、大学側の意向に添った受け答えが中心になりがちだ。キャンパスを歩いている大学生に話しかけて、大学の雰囲気などについて質問すれば、もっと本音の話を聞くことができるだろう。

事後研究は、訪問の印象、大学(学部・学科)の概要、研究室の学問内容、卒業後の進路、入試科目などについてまとめさせ

る。大学の個性化、多様化の結果、同じ名称の学部・学科でも、学問内容が大学によってかなり異なることがあるので、その学部・学科の研究内容を、具体的に調べさせる。環境情報学部、医療福祉学部など比較的新しい名称の学部・学科の内容も、思い違いのないようにきちんと把握させたい。

大学訪問の結果、志望していた学問が変わることもある。看護系を望んでいたが、大学の模擬講義を聞いて、自分が考えていた内容と違つことがわかったなどのケースだ。その場合、どこがどう違ったのか、自分はどうなることを学びたいのか、志望を変えるならどの系統を志望するのか、といったことをまとめさせる。心がぐらついたり、志望が変わった生徒に対しては面談が必要な場合もあるだろう。

事後研究した内容は冊子化したり、発表会などを実施する。この部分は職場訪問と同じだが、大学訪問の場合は、知識を共有化することで自分が行けなかった大学についての知識が得られるメリットもある。

講演会などは 事後研究で 理解を深化させる

以下の活動は学期中にも実施できる内容ではあるが、まとまった時間で集中的に活動することで、生徒もじっくりと活動に取り組みることができるだろう。

小論文…文章の書き方を指導したうえで、「国際化」「環境問題」などのテーマを指定、または生徒に自由にテーマを設定させて書かせる。文章を書く視点、書くために必要な知識などの事前学習が必要。優秀作品は各種コンクールに応募する旨を伝え、生徒のやる気を促す。入賞すれば、推薦入試でのアピールポイントにもなる。提出された小論文は、添削したうえで生徒に返却する。ほかに、読書感想文、新聞記事(社説)の論旨と意見を書かせる、などがある。

講演会…社会問題へ目を向かせる、職業観を育成するなど、講演の目的に合わせて講師を選定する。卒業生に依頼してもよい。企業に社員を講師として派遣してもらった場合、特定の企業の代

表として仕事内容の細かい話より、一人の社会人として仕事のやりがいなどを、具体的な仕事の様子などを交えて話してもらうと、生徒の関心を呼びやすい。

出張講義…学部系統ごとに大学の教授を招き、学問の内容について講演してもらう。講師の選定にあたっては、志望者の多い学部系統を優先させながら、できるだけ多くの学問分野から講師を選ぶようにしたい。心理学のように志望する生徒が多い割にその内容が正しく理解されていないと思われる学問も外せない。依頼する講師にはどんなテーマで何を話してもらいたいのか、高校側の意向を伝えておく。専門的な内容に終始する教授もいるので、意図をきちんと話し、ねらいを理解してもらうことが大切だ。ゼミに所属する学生の卒業論文テーマ、研究の進め方など、高校生が研究内容をイメージできるようにする。

講演会や出張講義では、話してもらった内容への理解を深化させるために、事後に感想文などを書かせることよいだろう。

VIEW'S method

クラス運営・進路学習のための

効果的な取り組みのための
手順とポイント

2

長期休暇中の進路学習